

[診断余話]

誤 診 と 確 診

吉 村 裕 之\*

筆者の専門とする寄生虫学の分野では近年新しい起病体が次々と明らかにされ、しかもこれらが臨床医学ときわめて密接するものが多く注目されつつある。ことに人畜共通感染症 (zoonosis) としてのそれである。

寄生虫病の最終的な診断は起病体 (虫体, 虫卵など) の同定 (identification) によることはいうまでもない。しかし日ごろ臨床医から設問されてくる病材料は、多くはただ一枚、もしくは限られた数枚の組織切片標本である場合がほとんどでその同定はしばしば困難である。すでに筆者のもとに寄せられてきたこれら多数の症例のうち、自信をもって診断しえた例は半数にも満たないのではなかろうか。虫体の同定を誤って報告した場合、それは misdescription として文献上に永久に残り、自身の不勉強さを天下にさらすことにもなる。慎重ならざるをえない。臨床医が興味ある症例に接したときの診断の難かしさはさこそと思われる。勉学日々努めることを筆者自身のいましめとしたい。

ここにささやかな経験をのべて余話に代えたい。

第1例: アニサキス症 (Anisakiasis)

31才, 男 主訴: 心窩部疼痛

現症: 1年前より心窩部疼痛および膨満感を訴う。臨床所見: 心窩部に圧痛および抵抗あり, 胃液は急峻高酸性型, 乳酸反応陰性, 糞便内寄生虫卵みとめず。手術所見: 胃前壁大彎寄りに 15×15×10 mm の限局性腫瘤あり, 粘膜漿膜部著変なし。胃切除術を施し, 19日後退院回復。予後きわめて良好。

組織学的所見 (私方に送られてきた一枚の病理組織標本): 粘膜下好酸球性蜂窩織炎内に線虫と思われる虫体断面 (詳細はここでは省略) をみとむ。寄生虫体は人蛔虫 (*Ascaris lumbricoides*) の幼虫と同定。 (本例は, 1963年千葉医学会雑誌 38巻第6号 516-522頁に「胃潰瘍を思わせた寄生性幼線虫症の2症例について」として報告) (写真1)。

時は1963年の暮, 一年のアメリカでの生活を終えて, 帰途各地の大学, 研究所めぐりの最後の寄り所, ルイジアナ州のチューレン (Tulane) 大学の有名な寄生虫学者

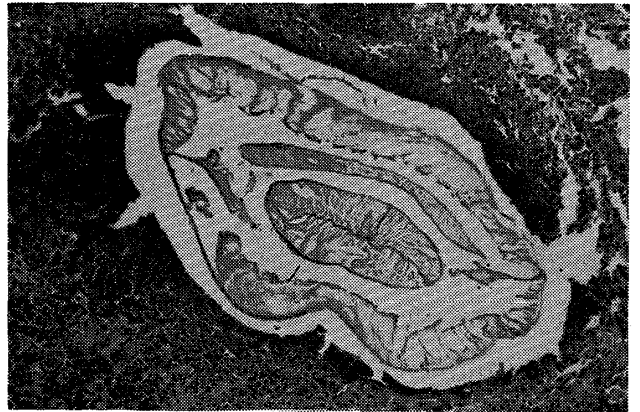


写真1. 胃アニサキス症例, 粘膜下好酸球性蜂窩織炎の中の特徴ある虫体断面

ビーバー教授 (Prof. Beaver, P. C.) を訪ねた折のこと。開口一番「あなた方の報告した人胃壁の幼線虫移行症に関する論文別冊をすでに入手しているが, 第2例の虫体の同定は誤っているように思う。おそらくあれは最近オランダの Dr. Van Thiel (1960) が報告したニシンに寄生している急性腹症の起病体, アニサキス様幼虫 (*Anisakis-like larva*) ではないかと思う。帰国後よく再検討した方がよい。」ということであった。筆者自身 Van Thiel の報告を不勉強のゆえに全く知らず, 帰国後詳細再検討して改めて専門雑誌に本例を訂正して再報告したことはもちろんである。その後の数年, 学会の重要課題として本邦のアニサキス研究ブームを招来した。サバ, アジ, スルメイカなどの海産魚に予想以上に検出されるアニサキス幼虫。それは日本人の食習慣「さしみ」を好む食生活の中にここ数年で300例をこえる報告例がみられる。印象に残る誤診の一例である。

第2例: 犬糸状虫感染症 (Dirofilariasis)

臨床診断 (術前): 肺結核? 肺癌?

42才, 男 既往症: 肝硬変, 肺結核で入院したことあり, 現症 (詳細省略) 1968年2月某日, 起床時背伸びしたとたん失神 (約20分間), 血圧測定困難, 直ちに輸血により間もなく好転, 疼痛の訴えなし。同3月胸部 X線所見にて左肺下野側方横隔膜に近接して 2.0×

\* 千葉大学医学部寄生虫学教室・助教授

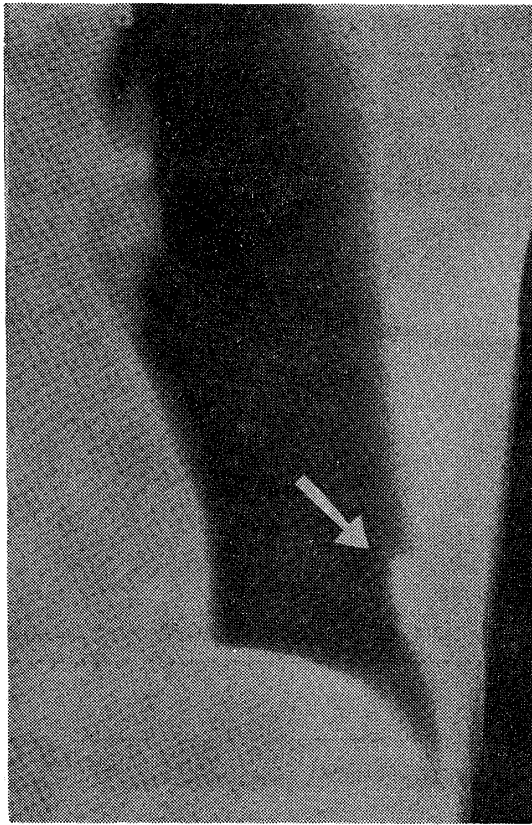


写真 2. 犬糸状虫症患者の左肺断層撮影によりみられた“coin lesion”

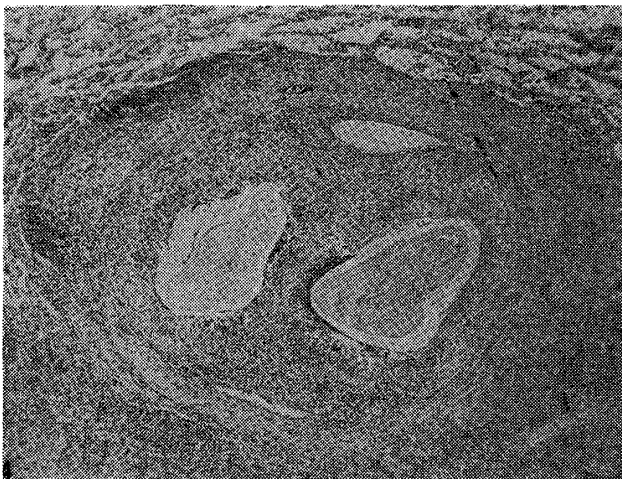


写真 3. 同上の肺臓組織標本肺動脈枝内を栓塞する虫体

1.2 cm の限局性陰影 (coin lesion) を確認 (写真 2 および 3)。

病理組織所見 (1 枚を筆者に送付される)：出血性肺梗塞の所見と中等大肺動脈内に器質化血栓と線虫断面をみとめた。犬糸状虫 (*Dirofilaria immitis*) 幼虫と同定。

筆者はこの標本を鏡検した瞬間ちょうど 3 年前に見た Am. Jour. Clin. Path. 43, 224, 1965 の Harrison & Thompson の “Dirofilariasis of human lung” の美し

い病理組織標本のイメージが浮かびあがった。このような症例はいつかはきっと日本からも見つかるに違いないと常に頭のすみにあったことが診断を早める結果となった。文献読みの重要さを心にしみて感じとった経験例である。日ならずさきの Prof. Beaver から次のような返信をえた。

“..... The worm is unquestionably *Dirofilaria immitis*, a dead sexually mature young female. As far as I know your case of *Dirofilaria* in lung is the first to be recognized in Japan or any other country of the Orient.....” (May 27, 1968)

ふつう野犬でその 60% の感染率においてその心臓内からまって寄生する犬糸状虫。蚊 (トウゴウヤブカ, *Aedes togoi*, アカイエカ *Culex*. sp.) など媒介として人体にその幼虫 (ミクロフィラリア) が注入される機会は決してすくないと思われる。これまで主としてアメリカ南部 (ことにルイジアナ, 南カロライナなど) で 16 症例の報告がなされ, その半数近くが成熟虫体にまで人体肺臓 (まれに心臓内) で発育しうることを後日知ったが, 今後アジア地域において追加報告例がなされていくと思われ注意していきたい。

筆者らの臨床寄生虫学の研究は決して実験室に一人閉じこもってのみいて進展するものではない。関心ある臨床医諸先輩のご協力なくしてはなしえない。研究もまた孤にして成らずである。 (昭和 45, 3, 6 受付)

表 1—3. アニサキス症に関する調査成績

表 1. 術前の臨床診断の内訳

胃癌または胃腫瘍 (?)	32 例	(36%)
胃潰瘍または十二指腸潰瘍	17 //	(19%)
急性虫垂炎または急性腹症	15 //	(17%)
腸閉塞・腸重積	3 //	
胆石症・胆のう炎	2 //	
終末回腸炎	2 //	
貧血	2 //	
結核性膜膜炎	1 //	
脾臓癌	1 //	
憩室炎	1 //	
不詳	13 //	(15%)

89 例

表 2. 89 症例の病巣存在部位の内訳

胃	体部および前庭部	小 彎 側	14	} 42	} 57 (64.0%)
		大 彎 側	13		
		不 詳	15		
	幽 門 部		10	}	
		不 詳	5		
小 腸	回盲末端		8	} 28 (31.5%)	
	回腸全域(Bauhin 弁より 30 cm 以上口側)		13		
	盲 腸		5		
大 腸	上行結腸		1	}	
	直 腸		1		
その他	脾 臓		1	} 4 (4.5%)	
	大 網 膜		1		
	腸 間 膜		2		

表 3. 発病 (病訴) より手術までの期間

突 発 性 (急性腹症)	17 例
1 カ月 以 内	5 例
1 ~ 3 カ 月	19 例
3 カ月 ~ 1 年	12 例
1 年 以 上	5 例
不 詳	31 例
	<hr/> 89 例

表 4. これまで報告された人肺臓の犬糸状虫 *Dirofilaria (immitis)* 寄生例の集計

症例番号	患者年齢	患者性	虫体発見部位	虫体所見	臨床症状または術前診断	患者居住地	報告者	年
1	34	男	右肺(上葉)	♀ 成虫	熱, せき, 左頸部痛	南米(コロンビア)	Faust et al.	1952
2	57	女	〃 (〃)	♀ 幼虫	心症状(1年以上)	U.S.A. (南カロライナ)	Dashiell	1961
3	38	女	〃 (中葉)	♀ 幼虫	せき, 胸痛	U.S.A. (マサチューセッツ)	Goodman & Gore	1964
4	60	男	〃 (下葉)	♀ 幼虫	悪寒, せき, 熱	U.S.A. (ウイスコンシン)	Harrison & Thompson	1965
5	53	女	〃 (上葉)	♀ 幼虫	無	U.S.A. (テキサス)	〃 〃 〃	〃
6	—	女	肺	?	X線陰影あり	U.S.A. (フロリダ)	Thatcher & Swartzwelder	1957
7	35	女	右肺(下葉)	♀ 成虫	せき, 胸痛	U.S.A. (ルイジアナ)	Beaver & Orihel LeBlance & Lafayette	1965 1962 1965
8	55	女	左肺(上葉)	♂ 成虫	X線陰影あり	U.S.A. (ルイジアナ)	Mitchell Beaver & Orihel	1965 1965
9	37	女	〃 (〃)	♀ 幼成虫	せき, 胸痛, 血痰	U.S.A. (南カロライナ)	Moore Beaver & Orihel	1954 1965
10	48	男	右肺(上葉)	♂(?) ?	せき	U.S.A. (南東部)	Osborne et al. Beaver & Orihel	1961 1965
11	48	女	〃 (下葉)	♂(?) 成虫	肺腫瘍(?)	U.S.A. (ルイジアナ)	Beskin et al.	1966
12	53	男	〃	1 虫 ?	肺腫瘍(?)	U.S.A. (ニューヨーク)	Tuazon et al.	1967
13	75	男	左肺(上葉)	♂ 成虫	肺癌? 肉芽腫?	U.S.A. (ヒューストン)	Navarrete-Reyna & Noon	1968
14	42	男	〃 (下葉)	♀ 幼成虫	肺結核? 肺癌?	日本(金沢市)	吉村, 横川, 門馬, 大和, 武川	1968
15	43	男	左肺(中葉)	幼虫	X線陰影あり	U.S.A. (ルイジアナ)	Tannehil et al.	1968
16	49	女	右肺(下葉)	?	X線陰影あり	U.S.A. (マサチューセッツ)	Spear et al.	1968
17	57	男	左肺(下葉)	?	X線陰影あり	U.S.A. (マサチューセッツ)	Spear et al.	1968